

# 松本清張記念館

◆館報◆

2011.3  
第36号

## 目次

- 松本清張研究会 第23回研究発表会…………… 2
- 特別企画展『松本清張と東アジア』…………… 4
- 講演会（特別企画展『松本清張と東アジア』開催記念）…………… 5
- シンポジウム 特別企画展『松本清張と東アジア』開催記念…………… 5
- 展示品紹介…………… 6
- 研究誌『松本清張研究』第十二号発刊…………… 7
- 友の会活動報告…………… 7
- トピックス…………… 8



『密教の水源をみる—空海・中国・インド』  
昭和59年4月書下ろし 講談社

現在入手できる本  
『松本清張全集』第65巻  
文藝春秋

「汝を待つこと既に久し」（『遺告』）  
いかにも空海を  
装飾した文章である。

## 作品介绍

「密教の水源をみる」の幹は紀行である。上海から向った無錫で、兩岸に家のせまる運河を遊覧。空海が漂着した福州では、台湾と向き合う要地のためカメラ撮影は禁止、清張が船上で風景をスケッチした。急遽変更した寝台車の旅は、二十七時間、南国特有の暑さと湿度の中を走った。鎮江で悠々たる揚子江を初めて見、大明寺で『鑑真記念堂』を見学する。西安では、青竜寺址で「発掘した考古学者に質問しきり」。蘭州では甘肅省博物館に寄り、白塔山に登っている。その足はインドに到り、デリーや「第三のインド宗教」（「密教」にあらず）創造の地、ナールンダーなどを巡るが、各地の風景がいぎいきと眼前に浮かぶ。

紀行の幹から伸びる枝に、清張は（空海）と〈密教〉についての思索の花を咲かせる。偉大な高僧像から伝説的な被膜を削りおとして、人間（空海）の実像を彫りだしている。冷徹に〈人間〉を追究する世界（人間）観、観察眼から、「空海は正式な留学僧ではなかった」「空海は恵果に会って初めて密教を持ち帰ろうと決めた」など独自の説が出てくる。

初めての中国訪問だったが、松本清張はそれまで中国と無縁だったわけではない。本文に、上海に着くなり、病中の巴金氏（中国の『人民作家』）に見舞いの花を届けたとの記事がある。巴金氏は答礼に娘をよこし、署名入りの『巴金選集』を贈り返礼とした。その本は今も記念館内再現「書庫」に残っているが、日中の国民作家のあいだに、いつの頃からこのような心の通い合いが生まれたのであろうか。

（学芸担当 中川里志）



# 松本清張研究会 第23回 研究発表会

平成22年12月4日(土) 午後2時 東京藝術大学

今回は、第六回松本清張研究奨励事業に入選された十重田裕二先生に、ご研究の占領期におけるGHQの検閲と松本清張の関わりについてご講演いただきました。参加された会員や清張ファンは、皆さん熱心に聴講されていました。

## I はじめに「GHQの検閲資料」と「作家清張の誕生」

興味深い問題は、アメリカ軍占領による検閲の終了とほぼ呼応するようにして、松本清張が作家としてデビューして行くことです。文学的出発がまさにGHQの検閲から解放された時期と重なります。この頃について清張自身「西郷札のころ」という文章で、「長い間の暗黒からやっと明るい、落ち着いた時代が来た」と書いています。《暗黒の時代から明るい時代への推移》です。「読者の胸に春を感じさせた」とも書いています。戦時中の日本の内務省の検閲を「暗黒」と捉える面もあるが、占領期のGHQの検閲もやはり「暗黒」と感じており、戦争と占領という二つの「暗黒」時代からの解放が、作家清張の出発になってきます。

## II 占領期メディア規制と清張をつなぐ〈点と線〉

松本清張はマスメディアに対して非常に強い意識、鋭敏な感覚を持っていた作家の一人です。以前『モダンリスト松本清張』という研究(記念館奨励事業)で調査を進めた結果、分かったことです。

「実感的人生論」の中で、清張が自分の読んだ本について書いています。岩波文庫の感

触。小林多喜二の「蟹工船」や「不在地主」、徳永直の「太陽のない街」を《単行本》ではなく、《雑誌》で読んでいたなど、どのメディアで読んでいたのかちゃんと記しています。メディアに対し非常に鋭敏、敏感に反応しています。清張の小説は、現在まで多数の映画監督が映画化しています。テレビでも頻繁にドラマ化されています。ほかにご自身が『霧プロ』を設立したこと、さらにはテレビドラマに出演することがありました。活字だけではなく映像メディアに対する積極的な対応も押さえる必要があります。

さらに、朝日新聞西部本社時代の経験がおそらく占領期の松本清張を考える上で重要になってきます。朝日新聞社の刊行物もすべてGHQの検閲に合っていたのだから、清張は日々その権力によるチェックに向き合っていました。占領期のメディア規制を身をもって体験しました。清張と検閲は切っても切れない深い関係にありました。そこに、清張が占領期日本のGHQの検閲に注目する重要な契機があったのではないのでしょうか。内務省の検閲とGHQの検閲、この二つを経験したことは、清張の文学を考える上でとても重要なことです。

では、実際にどういう検閲がGHQによって行われていたのでしょうか。アメリカのメリーランド大学に保存されている「ブランゲ文庫」を見ると、清張が体験したであろう

メディア環境がとてもよく見えてきます。一九四五年九月から四十九年十一月頃まで、日本国内すべての刊行物はGHQの検閲を受けていました。例えば、雑誌「人間」の一九四六年の検閲の状況を調べると、一年間で十二冊刊行されたうちの半数が「検閲あり」です。相当の割合です。この時点では、事前検閲でゲラを提出させられます。そして、「デリート(一部削除)」の要請があると、その部分を削った形で版を組み直して刊行します。その後、GHQは事後検閲に切り替えていきます。出版社などに自主的な検閲を任せて、刊行された印刷物を後で提出させました。

この時期、『プレスコード』が公表されました。新聞社や雑誌社はこれをチェックしながら自主的な規制をしていました。ただ非常に一般的、抽象的なものでした。一方、検閲官には、もっと細かい検閲の指針が配られていました。実際、情報量が違うために、新聞社の方では大丈夫だと思っていたものが、厳しくチェックされて戻ってきました。映画監督山本嘉次郎の文章を読むと、映画でも検閲が行われていたことが分かります。

## III 年譜に見る戦後の空白期と沈黙

「三分の一の人生」(河豚のひれ)というエッセイに、『朝日ウィークリー』という四ページのタブロイド版の週刊紙のことが出てきます。「ブランゲ文庫」の中にはありませんでしたが、松本清張が座談会(放送朝日)でこの朝日新聞社から出ていた娯楽紙への寄稿のことを話しています。一九四九、五〇年の頃のことです。占領期に清張がこういう娯楽紙に寄稿しながら習作を重ねていたことが分かっています。その後に「西郷札」はじめて表作を書く力をこの時期に蓄えていたのでしょう。まさに作家としての胎動期であったことが見えてきます。ただ、松本清張名の文

章はまだ見つけれられません。無署名か無記名か、別名の可能性もあります。これらの研究は、占領期の清張の空白を埋める大変面白い仕事になってくると思います。

## IV 「黒地の絵」と占領期のメディア統制

「黒地の絵」は、占領期の意味がより強く重要なものとして浮かび上がってくる小説です。一九五〇年七月に小倉で発生した黒人兵集団脱走事件を題材としています。冒頭からメディア、朝鮮戦争の開始を告げるワシントン「特電」で始まっています。極めてマスメディアに対して敏感に反応する作家らしい始まり方です。朝鮮戦争という国家間の戦争を伝える「特電」が冒頭で示されて、その世界的事件と対比されるようにして、GHQによって隠蔽された小倉での事件が語られることとなります。その事件とは、小倉というローカルな地方で起こった脱走米兵による婦女暴行事件と夫による復讐劇です。その落差を清張は十分意識しながら、この小説を書き始めていったのではないのでしょうか。



清張がメディアに非常に敏感であることは、よく読んでいくとその細部の表現に、至る所に見てとれるわけです。例えば、事件の報道規制。事件後、小倉キャンブの司令官の市民に対する遺憾の短い声明文が九州地区の地方版にだけ載ったという。世界各国をめぐる特電に対して、こういうローカルなメディアの問題に清張は注意をしています。これもやはり重要ではないでしょうか。

## V メディア小説としての「黒地の絵」

「黒地の絵」はメディア小説として読んでいくことができます。第二章の冒頭でも、朝鮮戦争の状況を告げる一応客観的と言える報道から始まっています。しかしこの大きな報道の中では、多くの兵士たちが亡くなり、主人公の男が報復を考えている妻を暴行した黒人兵も、その戦争の中で死んでいっていることは、全く語られることがありません。そこに清張は目を向けていきます。また、「一九五一年元旦の各新聞の第一面は」と、マッカーサーが日本国民に与えるメッセージを発表したとの『新聞』を書きこみます。こういう『報道』を殊更に記しながら、その中では絶対に取り上げられないことのない物語を、「黒地の絵」は扱っています。「噂(うわさ)」というメディアも巧に使われています。「最初の噂は非現実的であった」

と出てきて、「日がたつとともに、噂は少しずつ真実性を帯び」と続きます。戦死体の処理についてGHQは隠したが、噂は規制とは裏腹に、どんだん人の口から人の口へと伝っていきます。清張はそこを見事に書きこんでいます。「戦死者の『死体処理』は」と噂が伝えられ、「しだいに実体のかたちをとってきた」という。噂がリアルになっていくそのプロセスを、清張は非常に上手く描いています。「ラジオ」の表現も上手い。死体処理の労働者の募集が駐留軍関係の仕事として、「ラジオが夜九時のニュースを終わったあと」の放送で告知された。しかしその後、「ラジオのその告知」がなくなっていく。駐留軍の死体始末の設備が恒久化したことがその理由であった、と清張は書きます。「黒地の絵」は、清張が占領期のメディア規制を十分に意識して、細部で様々なメディアを錯綜させる形で小説の表現にまともについていたことが分かります。

「黒地の絵」の執筆の動機は、「自分の周辺で起こった事件」ということもありすが、「最大の動機はこの問題をこのまま埋もれさせてはならない」(朝日新聞「福岡版」というものでした。清張は出発期、占領期にメディアが伝えることのなかった地方の埋もれた事実を、物語として語っていく方法をとりまします。また出発期の発想法、創作のプロセスとして、地方の事件に注目しながらもっと大きな問題、大きな黒幕に迫っていくプロセスが浮かび上がってきます。例えば、「西郷札」は、一人の男の秘話が歴史的な大きな事件に繋がっていくという問題になります。「或る『小倉日記』伝」もそうです。一人の男の人生が鷗外という文豪の人生に接続していきます。そして「黒地の絵」も、小倉という一地方で起こった事件が、朝鮮戦争に結びついていくように表現されています。小さな知られざる出来事を、歴史的な大きな事件に結びつけて小説化するという方法、細部を全体へと繋げていく発想が清張の出発期にはありました。

このように考えていきますと、「黒地の絵」から『日本の黒い霧』へと、さらに大きな黒い隠された問題へと清張が迫っていくのは、当然の道筋でした。『日本の黒い霧』の中の事件は、おそらく誰かが書かなければ、ずっと隠されたままでした。清張はそれを暴き出して、こうとする問題意識を持っていました。『黒地の絵』でも確認できた意識です。GHQの統制に注目して、一つ一つの問題(点)を暴きながら、一つの克明な(線)へと繋げ、占領期の大きな黒い霧を暴き出していく。実際に『日本の黒い霧』の執筆の動機は、「背景がGHQのある部分に関係していることに行きついた」とにありまします。『日本の黒い霧』の解説で杉浦明平さんは、「占領軍の批判は、誹謗として禁じられていた」が、一連の怪事件の中に「占領



講師 十重田 裕一

○早稲田大学教授  
○専攻 日本近代文学

早稲田大学助教授を経て現職。第六回松本清張研究奨励事業に入選(共同研究「モダニスト松本清張—マスメディアとの相互関連性をめぐる研究」)。近著に、「文学者の手紙4 昭和の文学者たち」(共編、二〇〇七年)、『占領期雑誌資料大系(文学編)』(共編、二〇〇九年)などがある。

## 『作家デビュー前夜の松本清張—占領期日本のメディア規制との関連から』

研究発表  
「貞明皇后に仕えた女官たちから見た『神々の乱心』—中世以来の女官と宮廷巫女の系譜—」  
発表者  
美馬 弘 (多摩美術大学特別研究員)

清張は、作家活動を進めていく中で、占領期のメディア規制による隠蔽の重要性に段々気づいていったと思います。その重要性は、誰かが発言しなければそのまま埋もれていくと強く感じ、これを告発するように執筆を展開していっただろう、と改めて作品を読み返して考えました。埋もれた歴史を発掘する『考古学』が清張の中にはありました。権力によるメディア統制への憤りは、朝日新聞社時代に日々感じたことでしょう。埋もれてしまった歴史を調査し、発掘して書くことで風化させず、集団の記憶として蘇らせ、残し対抗していく、としました。その後もそういう創作方法をとって、小説を書き続けていきました。改めてその偉大さに気づかされました。

清張がメディアの発信者となったとき、占領期の体験がまさに小説表現の形式になって現れ、その後の小説の非常に重要なモチーフになっていきました。高度経済成長期になると、占領期の記憶は急速に失われていきます。日本の多くの人たちが忘れようとする中で、清張はこの占領期に焦点を当てていきました。忘れないその影の部分に隠れた重大な事件に照明を当てて、創作を進めていったと思います。

## VII おわりに

軍の政策の変動やその謀略」を導入したという点で「画期的な意味」を持っていたと書いています。今回、改めて清張の先見性が見えてきたような感じがします。



# 松本清張と東アジア

—— 描かれた〈東アジア・東南アジア〉読まれる〈清張〉

■ 企画展延長 ■ 好評につき、8月15日(月)まで延長開催いたします

松本清張は、東アジアや、東南アジアの国々を舞台とした作品を数多く残しました。東アジアとの関わりは戦前、日本陸軍の衛生兵として朝鮮半島に駐屯したことに始まります。

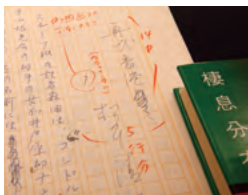
戦後は、復員した北九州市小倉で一市民として朝鮮戦争を〈体験〉し、十八年後、作家としてベトナム戦争に向き合います。戦時下の北ベトナムの首都ハノイで、〈時の人〉ファン・バン・ドン首相と単独会見に臨みました。取材でラオスやマレーシアの地も踏み、中国では文学者の代表と意見交換しました。

そして現在、東アジア、特に中国、台湾、韓国で、松本清張作品は数多く翻訳され、幅広く読まれています。



## I 清張の描く東(南)アジア

清張文学の特徴の一つに《世界への視座》があります。松本清張は広く海外に眼を向け、多くの作品を書きました。中でも、朝鮮半島(韓国・北朝鮮)や中国といった東アジアや、ベトナム、ラオス、マレーシアなどの東南アジアを舞台にした作品を紹介します。



## II 清張と東アジア

—— 衛生兵・市民・作家・古代史家・ジャーナリストとして

松本清張の東アジア体験は、陸軍衛生兵としての朝鮮半島駐屯にさかのぼります。小倉で「米軍黒人兵脱走事件」など朝鮮戦争を経験し、作家になってからはベトナム戦争や中国の「林彪・四人組事件」などに、ジャーナリストとして向き合いました。古代史家とベトナムの古代文化を視察し、取材で中国、ラオス、マレーシア、香港を歴訪しています。



## III 東アジアで読まれる〈清張〉

—— 韓国・中国・台湾

松本清張は東アジア各国で、30年ほど前から翻訳され、現在も出版され読まれ続けています。その受容のあり方や読者の声を紹介し、展示会場に東アジアの架空の書店・清張コーナーを再現しています。



### ■ 読者の声 (書籍レビューより)

韓国

『宮部みゆき責任編集  
松本清張傑作短篇コレクション』(上・中・下)

出典サイト: [www.yes24.com](http://www.yes24.com)

短篇のコレクションがあるテーマに選ばれていて良かったし、また、そこに宮部みゆきの解説が付け加えられ、作品を理解するのに役に立ちました。推理小説の巨匠ですが、純文学にも一家見があるという意図で、「或る『小倉日記』伝」から始め、「地方紙を買う女」など代表的な短篇が清張の推理小説感覚を感じさせてくれます。

中国

『砂の器』 重みのある本です

出典サイト: [www.dangdang.com](http://www.dangdang.com)

一気に読み終わりました。素晴らしい作品とは言えません。標題に「重厚」の二文字がありました。作者への敬意が表れています。松本清張は社会現象を通じて社会の本質を指摘し、人間の醜さ、エゴイズム、淀んだ心理を全て暴きだしました。この作品は60年代初めに発表されましたが、今読んでも現在の中国社会が参考とすべき価値があります。

台湾

『駅路』

出典サイト: [www.books.com.tw/](http://www.books.com.tw/)

松本清張だからこそ、理性的な文章で昭和の男性が我慢強く堪え忍ぶ、声無き叫びを凝集できました。長く平凡な人生で、家庭と妻子のために全ての責任を負い、耐えながら懸命にもがく姿が描かれています。またその時代が間もなく終わろうとする作品前半部分では、時代の大きな流れに衝撃を受け、ただ生きることを求める自由のない男性のために、移り変わる世の中の孤独でやるせない挽歌を創作したのです。

特別企画展 『松本清張と東アジア』記念講演会

『松本清張と東アジアの熱戦・冷戦』

講師 川村 湊 (法政大学教授)



■日時 平成二十二年十二月六日(月) 午後六時 ■会場 記念館地階「企画展示室」前ホール

○松本清張は朝鮮半島に対する興味関心を常に持ち続けていた。「日本の黒い霧」も最終章は「謀略・朝鮮戦争」だが、占領中の怪事件はすべてアメリカGHQの権力が仕組んだ謀略とする、謀略史観が流れているのが気になる。確かに日本は、一九四五年から四九年に不可解な事件が多発し、米軍と日本の保守政権と左翼勢力の、三つ巴の様々な謀略が渦巻く空間だった。

○ただこれは日本だけのことではない。韓国、朝鮮半島、台湾、中国など、東アジアの戦後の問題にまで拡がっていて、実は「アジアの黒い霧」なのではないか。一九四七年の二月二十八日には台湾で「二・二八事件」が起きている。これは、台湾に進出した国民党が台湾人を暴力的に制圧した事件。一九四六年十一月二十六日には「帝銀事件」が起き、同年四月三日には「四・三事件」。これは、韓国の済州島でパルチザンのゲリラたちが韓国政府と米軍に反対して立ち上がった事件。「下山事件」、「三鷹事件」、「松川事件」が起きた一九四九年には、中華人民共和国が成立し、アメリカは相当に焦る。松本清張さんも広げて「東アジアの黒い霧」の問題として書いてくれたら、もう少し



納得できたかもしれない。朝鮮戦争からベトナム戦争へと繋がっていく、戦後アメリカのアジア侵略の過程の中で、謀略と捉えていくと、これらの事件は各国の平和(民主)勢力がアメリカの謀略に対して果敢に闘った、まさに冷戦でもあり熱戦でもあったのではないかと、最近は思い始めた。

○松本清張がなぜ「北の詩人」を書いたのか、謎である。松本さんは衛生兵として朝鮮半島に駐屯した。これは清張文学にとって非常に大きな体験だった。しかし、ストリートにはその朝鮮体験を書かなかった。侵略者の前衛として朝鮮にいたことで、松本さんはやはり精神的な傷のようなものを負ったのではないか。一種の贖罪感があり、書けなかったのではないかと。だから、林和という朝鮮人の詩人の心情に託してその贖罪感のようなものを書きこもうとしたのではないかと。

○「北の詩人」を読むと、韓国の人は「転向」にこんなにかだわるかな、もっとさっぱりしている気がする。林和は悩みに悩む。林和は民族を裏切って日本の特高警察の軍門に下り、弱味を握られてアメリカのスパイになったことを、深く悩んだという清張さんの解釈は日本人にすぎない気がする。しかしそういう心情があったから、清張さんは自分のことのように林和に過剰にのめり込んだのか。日本の帝国主義戦争の加害者としての痛みをいかに表現するか。その表現として、「北の詩人」では、事実とは別に、林和が過剰に贖罪意識を背負った主人公として描かれたのではないかと思っている。

『松本清張と東アジア』記念シンポジウム

■日時 平成23年3月26日(土) 【開演】午後3時  
 ■会場 北九州市立男女共同参画センター・ムーブ(2階・ホール)  
 ■参加者 300名



第一部 記念講演

演題 『文学はすべてミステリー』

■講師 阿刀田 高  
 (作家・日本ベンクラブ会長)



第二部 パネルディスカッション

テーマ 『東アジア(中国・台湾)で読まれる松本清張』

- パネリスト 藤井 省三 (東京大学教授)  
 ○基調講演 『中国における翻訳『砂器』と映画『砂之器』』
- パネリスト 王 成 (中国・清華大学教授)  
 ○基調講演 『清張ミステリーと「改革開放」の中国』
- 司会・コーディネーター 奥田 智子 (九州朝日放送)  
 野上 隆生 (朝日新聞西部本社)



藤井 省三氏



王 成氏

※このシンポジウムの内容は次号で詳しく紹介します。





# 江戸切絵図



常設展示室1の《歴史小説と時代小説》コーナーには、二枚の江戸切絵図が展示されている。「八町堀細見繪圖」と「築地 八丁堀 日本橋南之圖」である。清張はこういった古地図や、絵図をまとめた図版などを数多く所蔵していた。

江戸切絵図は、江戸全図に対して、各区分ごとに描かれた絵図である。切絵図の図版をめくっていると、現代でも似たものがあるではないかという既視感にとらわれる。それは、よく職場の事務所などに置いてある住宅地図に似ているのだ。それもそのはず、※『ゼンリン50年史』によると、最初の住宅地図を作るにあたり参考にしたのが、江戸の古地図であったのだという。創業時の社長は「古地図には大名、旗本など武家の屋敷や商家の屋号が詳細に記されており」、「『こんなふうには作れば必ず喜ばれるはずだ』と直感した」と

いう。

展示している絵図は、本来は十六又は十八分の二に折り畳んであったものを広げている。図版『日本地圖選集 嘉永慶応 江戸切繪圖全三十舖』（人文社）解説は次のように締めくくられている。「私たちはこの絵図を切絵図とよんでいる。しかし作者たちは、これは『ふところ絵図』というのだよ、と微笑むかもしれない。まさしく、懐に入れて持ち歩くための、コンパクトで実用的な地図だ。」

清張作品「彩色江戸切絵図」は、江戸の市井を描いた六つの短篇から成る時代小説である。江戸切絵図を眺めていると、今は東京と呼ばれる都市に埋もれるようにして面影を残す地名や石垣に誘われて、人々の暮らしが立ち上がってくる。まるでそこに現出した生活の喜怒哀楽を、そのまま描き取ったかのような作品集が「彩色江戸切絵図」だ。同様に想起されるものは岡本綺堂の「半七捕物帳」や、野村胡堂の「銭形平次捕物控」、池波正太郎の「鬼平犯科帳」などの「捕物帳」があるであろう。清張は、綺堂を「江戸情緒を湛えた時代の」を描く最後の作者とし、江戸言葉も手本としている。「彩色江戸切絵図」には、岡っ引きも登場するが、所謂「捕物帳」シリーズとは少し趣が異なるといえよう。

時には切絵図をはみ出していると思う話もあるが——そこがいかにも清張らしい。

※株式会社ゼンリン：国内の住宅地図やカーナビなどの電子地図情報の提供で高いシェア率を誇る。北九州市にある本社は、記念館のすぐ側。

（専門学芸員 柳原 暁子）

## 老よしとハルコの探検！清張記念館

### 1F “ジョウノ・キャンプ模型”の巻

**きよし** こんな所に模型があるね。確かこれは以前開催された『黒地の絵展』のときのジオラマだな。

**ハルコ** この時代には、ここに路面電車が走っていたのね。作品の題材となった黒人兵集団脱走事件からもう60年かあ。

**きよし** この場所は長らく自衛隊の分屯地だったけれど、今度「城野地区ゼロ・カーボン先進街区」として、最先端のエコの町に生まれ変わるよ。平成25年度頃には宅地分譲も始まるんだって。

**ハルコ** 作品の面影を残した場所が消えるのは残念だけど、隣の推理劇場では事件についての詳しい映像が紹介されているわ。



黒人兵が脱走したといわれる排水溝も、もうすぐ見られなくなるかも。



**きよし** この事件を埋もれさせまいと、清張は「黒地の絵」を書き上げたそうさ。僕たちも北九州市の住民の一人として、いつまでも心に刻んでおこう。もちろん、僕の君への思いもこれからもずっと変わらないよ（よし！ 決まった）。

**ハルコ** ———— この物語はフィクションで、実在の人物とは関係ありません。

**きよし** え～。

物語の舞台となった昭和25年前後の城野周辺の地形をもとに製作された模型は、人々の日常にまだ「戦争」というものが身近にあったことを語ります。「ジョウノ・キャンプ模型」は常設展示室1奥、連絡通路手前にあります。

# 研究誌『松本清張研究』第十二号発刊



特集のテーマは「清張と東アジア・東南アジア」です。清張は朝鮮半島を始めとして終生アジアに関心を持ち続け、人物・歴史・事件と様々な題材を通じて多角的に描きだしました。また、清張作品は今もなお各国で読者を惹きつけ、新たな読者を生み出し続けています。各界の第一人者がそれぞれの「清張像」を語るエッセイと併せて、清張の新たな魅力をお伝えします。

## 特集 「清張と東アジア・東南アジア」

座談会

東アジアに向けた清張のまなざし

島田雅彦、川村湊、宮田稔栄

論文

朝鮮半島

『北の詩人』ノート

和田春樹

松本清張の朝鮮と韓国における受容

南富鎮、鄭惠英

中国

中国高度経済成長期の「人世」と「人性」を映し出す両面鏡

——『東アジアと松本清張』論序説

藤井省三

清張 東アジア 密教

松長有慶

ラオス

阿片と頹廃とCIAのラオス ——『家の白い脚』

綾目広治

マレーシア

忘却された戦争 ——松本清張『熱い絹』と東南アジア

久保田裕子

ベトナム

考察…松本清張は「超ジャーナリスト」である

浅井泰範

再録 特派員 全集・単行本未収録

松本清張

エッセイ

私のなかの松本清張

私の松本清張体験・卑弥呼と鷗外

篠田正浩

清張さんの叱る声

童門冬二

社会派という「レットテル」について

猪瀬直樹

〈音〉への感性

安藤 満

幻の歴史小説

天野 敬子

松本清張先生の思い出

文 潔 若

## 友の会 活動報告

### ● 文学散歩「山口」

11月19日(金) 参加者 44名

清張作品に縁のある地を訪ねる文学散歩。今回は私説・日本合戦譚「巖島の戦」、小説日本芸譚「雪舟」の舞台となった山口の地を訪ねました。当日は行楽日和で美しい紅葉の西の京都を堪能することができました。



雪舟庭にて

中原中也記念館→山口県立美術館→瑠璃光寺→龍福寺・大内氏遺跡→常栄寺・雪舟庭と訪れました。中原中也記念館では観覧時間が足りないと



いう声も多くお聞きしました。

山口県立美術館では丁度、「雪舟と雪舟流」が開催されており、水墨

画の繊細でありながらも力強い雰囲気を感じました。瑠璃光寺では国宝五重塔に魅了され、多くの方が写真に収めていました。大内氏遺跡見学後、雪舟庭では皆で廊下に座り、紅葉の美しい庭園を眺め素晴らしい景色をお土産に帰路に着きました。今後も更に魅力ある文学散歩にしていきたいと考えています。

### ● 友の会会員募集 ●

松本清張記念館友の会は8月1日から翌年7月31日までを一年度として取り扱っています。

新規会員を募集中です!

友の会では清張ゆかりの地の見学、読書会・講演会の開催、会報の発行など多彩な事業を展開しています。

会費は1年間で3,000円です。

友の会入会のお申し込みは… TEL. 093-582-2761 松本清張記念館友の会事務局まで



平成 23 年度  
中学生・高校生

## 読書感想文 コンクール

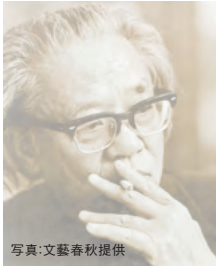


写真:文藝春秋提供

清張作品の読書感想文を、中学生・高校生を対象に募集します。

若年層に、より多くの作品に親んで欲しい、表現力を学び豊かな心を身に付けてもらいたいという願いから、このコンクールは始まりました。そして、これからを担う若者たちに、探求の人・松本清張の精神を伝えていくことができれば幸いです。

■応募対象 全国の中学生・高校生

■課題図書 中学生・高校生ともに下記から1作品

「球形の荒野」(文春文庫「長篇ミステリー傑作選 球形の荒野」上・下)

「断碑」(新潮文庫「傑作短編集(一) 或る「小倉日記」伝」、光文社文庫「松本清張短編全集3 張込み、カッパノベルズ」同)

「腹中の敵」(新潮文庫「傑作短編集(四) 佐渡流人行」、光文社文庫「松本清張短編全集3 張込み、カッパノベルズ」同)

■応募方法

- 中学生、高校生ともに1200～2000字程度の読書感想文を書き、応募用紙に添えて提出してください。
- 手書き、ワープロどちらでも結構です。ただし、全体の字数が分かるように応募用紙に1行の字数×行数を記入してください。
- 原稿は自作で未発表のものに限ります。なお、応募原稿はお返しいたしませんので、必要な人はコピーをおとりください。

■応募締切 平成23年10月31日(月) ※当日消印有効

■応募先 〒803-0813 福岡県北九州市小倉北区城内2番3号  
松本清張記念館 感想文コンクール係  
※応募用紙は記念館HPからダウンロードできます。

■選考 松本清張記念館内の選考委員会により選考します。

■発表

審査結果は、12月下旬頃、本人と学校に通知します。  
最優秀賞、優秀賞の受賞者には、表彰式を行います。  
なお、入選の結果や受賞作品を記念館刊行物等に掲載することがあります。その場合、著作権は松本清張記念館に帰属します。

■賞品 (受賞人数等、変更の場合もあります。)

- 最優秀賞(1人)  
《モンブラン》万年筆「マイスターシュテックNo.149」
  - 優秀賞(中学の部…1人)(高校の部…1人) 文具など(未定)
  - 佳作(中学の部…3人)(高校の部…3人)  
記念館グッズと図書カード
- ※なお、最優秀賞は中学の部、高校の部で各一回ずつの受賞と限らせていただきます。最優秀賞受賞後の応募も歓迎します。すでに受賞した人からの応募が賞に該当する場合は「特別賞」として「館報」掲載を予定しています。

- 主催 北九州市教育委員会 ●主管 北九州市立松本清張記念館
- 協力 モンブランジャパン

### ・ 2010年度・ドラマ化された清張作品 ・

2010.11.26(金)・27(土) 「球形の荒野」 フジテレビ

2010.12.8(水) 「一年半待て」 BS-TBS



イラスト:山藤 章二

編集・発行

### 松本清張記念館

〒803-0813  
北九州市小倉北区城内2番3号  
TEL 093 (582) 2761  
FAX 093 (562) 2303  
http://www.kid.ne.jp/seicho  
制作 (株)エディックス

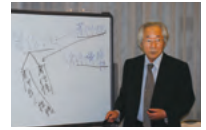
- 開館時間 午前9:30～午後6:00 (入館は午後5:30まで)
- 休館日 年末(12月29日～12月31日)
- 観覧料 一般/500円(400円) 中・高生/300円(240円)  
小学生/200円(160円) ( )は30人以上の団体
- アクセス JR: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分  
小倉駅からは100円バスをご利用いただくことが便利です(小倉城・松本清張記念館前下車)  
車: 北九州市都市高速、大手町ランプより5分

## 瀬戸内文学館連絡協議会学芸員 担当者研修会

■ 12月21日(火)

■ 小倉リーセントホテル

■ 講師 阿部 浩二(岡山大学名誉教授)



阿部浩二先生を小倉にお招きし、「文学館と著作権」というテーマで講義していただきました。先生は、著作権法の生成と歩みを話された後、同法の「著作権者の権利」は、「(狭義の)著作権」と「著作人格権」とに分けられる、「(狭義の)著作権」は、財産権として、移転、相続が可能であるが、「著作人格権」は一身専属の権利であって、相続の対象とならない、と述べられ、次のように続けました。

「人格権」には、「公表権」、「氏名表示権」及び「同一性保持権」がある。文学作品には「同一性保持権」があるので、「てにをは」を勝手に直してはいけません。故人の未公表の手紙については、「公表権」は一身専属のものだから、著作者が死亡すれば公表権も消滅するので、その著作人格権を侵害しないような形で公表はしてよい。もともと、手紙の内容が単なる時候の挨拶などにとどまらず、著作物としての内容があるときは、財産権としての著作権が手紙の執筆者に生じ、それは、執筆者の死亡によりその相続人に承継されることになり、その公表権も執筆者の死亡後50年は相続人に帰属することになる。公表権は、著作物を公表する権利のことだが、公表とは、発行と展示に二大別されるといってよい。手紙の公表(文学館では展示にとどまると思う)は、発行の中心である複製ではなく、展示にとどまる限り(著作物の展示権は、美術の著作物や写真の著作物に認められているものなので)、手紙の展示は、複製でも著作権法上の展示でもない、文学館は、手紙の執筆者が死亡しているときは、それを展示してもよいという理解である。ただし、手紙の内容が第三者にかかわるときは、その第三者との関係で、プライバシーの問題が生じることがあるし、また、公表権のような著作人格権も相続の対象となり、それは財産権の消滅するまで存続するという見解もある。これについての判例は今までないと思う。手紙の発信人が生存しているときは、受取人は書面に記された手紙の内容(著作物)についての権利まで譲渡されていないのが普通であるから、発信人の許諾なく手紙を公表することは認められない。

講義の後、研修生との質疑があり、有意義な研修会でした。



### ● 編集後記 ●

今年3月11日に発生した東日本大震災で被災された方々に心よりお悔やみ申し上げます。記念館でも募金箱を設置し、皆様のご協力をお願いしました。昨年12月1日にスタートした特別企画展『松本清張と東アジア』は3月末までに7,000人を超える方が入場されました。8月15日(月)まで会期を延長しますので、ぜひご来場ください。(西本 衛)

